

【いんしょう】

懐爺によると、忍者に「三病」ありと云う。

恐れ・侮り・考え過ぎが、忍者の三病で、この病気に罹（かか）った忍者は、忍者ではなくなると云う。

ぼくは忍者でなくなるのは厭だから、なにも恐れない、だれも侮らないことにしましたが、考え過ぎはなかなか治りません。

考え過ぎを治す手はないものか、懐爺に聞くと、

「それはじつに簡単です」

と云う。

「第一印象を大切に、それだけを信じればいいんです」

と云う。

好きも嫌いも、第一印象。

悪人か善人かを見極めるのも、第一印象。

いずれはお嫁さんにするの、第一印象で決める。

どんな賭け事も、第一印象。

なるほど、これなら考え過ぎなくていい。

そのことによってぼくは、完璧に近い忍者になりました。

いや、そうなったと錯覚しました。

その錯覚は何年も治らず、よって第一印象主義も治らず、そのせいで二十年后ぼくはひどい嫁をもらい、そのせいで賭け事に負けつづけ、ひどい借金を背負いました。

懐爺を恨んでいるかって。

とんでもない、忍者になろうとした、ぼくがいけなかったのです。

忍者が考え過ぎないのは、莫迦な考え休むに似たり、との信念があるからなんでしょうが、ぼくが考え過ぎなかったのは、考える莫迦は休むに似たり、という勘違いだったからで、みんなぼくがいけないのです。

それはともかく、第一印象主義だったぼくは、ある日あるとき、それは変な霧雨の降る日でしたが、村八分になっていた変なおやじに、とつぜん変な印象を持ちました。

それで、変なおやじのところへ行って、

「おやじ、へんだのう」

と正直に云うと、

「俺が変なのはお前のせいだ」

「なぜじゃ」

「お前の目玉が変だからじゃ」

「わしのめだま、どう変なんじゃ」

「お前の目玉、蒼く光っているぞ。そういう目玉で見るから、だれでも変に見えるのだ」

「なるほどのう。かがみをかしてくれや」

変なおやじから借りた鏡をのぞくと、あれま、ぼくの目玉が蒼く光っているではありませんか。